



浦上天主堂

長崎県には巡回教会を含めると百三十のカトリック教会がある。その中で信徒数が一番

多いのは浦上教会で約七千人。二番目に多いのが滑石教会の二千二百人であるから、浦上

が群をぬいて多い。大浦天主堂やグラバ

## 浦上の信徒

長崎巡礼⑦

一園とは反対方向、近くに平和公園がある。原爆落下の中心付近で、一万二千人の浦上信徒のうち八千五百人が原爆死したと推定さ



れている。

浦上は一五七〇年ごろからキシタンの村であった。一五八四年、キシタン大名の有馬晴信は浦上をイエズス会に寄進、以後一六〇四年にキリスト教禁教令が出されるまで、浦上はキシタンの里として栄えた。村にはサ

ンタ・クララ教会が建てられ、神父が常駐していた。しかし禁教令で閉鎖され、一六二〇年には破壊された。徳川幕府のキシタン弾圧は過酷を極め「寺請制度」で住民はすべて仏教徒にされ

「五人組制度」で隣同士を見張り役として、キシタンかどうかを監視させた。一六四四年、小西マンシヨの殉教後は日本には一人の宣教師も存在しない中で、浦上村では信徒だけの組織をつくり、教理を教えたり洗礼を授けたりしながら極密の中で二百五十年間、キリスト教信仰を守り続けた。

鎖国政策が改められ、一八六五年の信徒発見

で有名な大浦天主堂でフランス人神父に信仰を告白、これを契機に浦上の潜伏キシタン迫害が始まった。

一八六七年の「浦上四番崩れ」で信徒は次々に逮捕され、三千三百九十四人が全国各地の藩に流配された。そこでキリスト教信仰を捨てよう拷問にかけられたが、諸外国からの抗議でやっと流配は中止され、浦上に帰された。しかしこの間に六百十三人が死去している。

浦上に帰った信徒たちは苦しく貧しい生活の中で自分たちの教会づくりに奔走。浦上天主堂は着工から三十年後の一九二五年(大正十四年)に完成した。しかし、浦上の信徒の受難は続き、昭和二十年八月、長崎に降下された原爆で、ほぼその中心地にあった浦上天主堂は倒壊炎上、信

徒約八千五百人が犠牲になった。昭和三十四年に現在の浦上天主堂が再建され、教皇ヨハネ・パウロ二世の来日にあわせて改装整備された。浦上の信徒の長い苦しみを全く感じさせない美しい教会である。

今回、一番印象に残ったのは、聖堂正面の右横にある「被爆マリア小聖堂」の聖母マリアの顔である。一九三〇年にイタリアから輸入された高さ二メートルの聖母マリア像は美しさと優しさに満ち、戦前の浦上天主堂のシンボルだった。しかし原爆で

破壊、焼失した中で、奇跡的に顔の部分だけが変わり果てた姿で見つかった。二十六歳の顔は黒く焼け、彩色は取れ、清く澄んだ目は空洞のままになっている。さらに小聖堂の左側の壁には原爆で死亡した浦上の信徒の黒い名札が何段にも並んでいる。浦上に生きた信徒のもう一つの苦しみの跡がそこにあった。

「命をかけて『いのち』を生きる」(二〇〇八年十一月、長崎での百八十八殉教者列福式から)



浦上小聖堂の被爆マリア